

# 梁塵秘抄口伝集

## 卷第十

### その一

## 卷第一

古より今にいたるまで、習ひ伝へたるうたあり。これを神楽かぐら催馬楽さいば風俗ふうぞくといふ。かぐらは天照おほん神の、天の岩戸をおし開かせたまひける代に始まり、催馬楽は、大蔵の省しゆの国々の貢物おさめける民の口遊くちあそびにおこれり。是うちある事にはあらず。時の政よくもあしくもある事をなん。ほめそしりける。さいばらは、公わたくしのうるはしき遊樂のことのね琵琶の緒ふえの音につけて、わが国の調ともなせり。皆これ天地あめつちを動かし、荒ぶる神をなごめ、国をおさめ民をめぐむよたたとす。風俗は調樂の内參、賀茂詣などにこれを用ゐらる。また臨時客にも古くはうたひけり。近くは絶へてうたはざるか。此の外に習ひ伝へたるうたあり。今様といふ。神哥、物様、田哥にいたるまで、ならひ多くしてその部ひろし。用明天皇の御時、難波の宿館に、土師はの連むらといふものありき。聲妙なるうたの上手にてありける。夜家にてうたをうたひけるに、屋のうへに附けてうたふものあり。あやしみて謡ひやめば、音もせず、又うたへば又つけてうたふに、驚きていでて見るに逃ぐる者あり。追ひてゆきてみければ、住吉の浦にはしりいでて、水に入りてうせにけり。これは、ケイ惑星けいごくせいの此哥をめでて、化しておはしけるとなん。聖徳太子の傳にみえたり。今様と申事のおこり。

神楽、催馬楽、風俗、今様の事の起りより初めて、娑羅林さらりん、只の今様、片下、早哥そうがいたふべきやう、初積、大曲、足柄、長哥を始めとしてやうやうの聲かはるやうの哥、田歌に至る迄し終りぬ。かやうの事一様ならねば、後にそしること多からむか。それをしらず。故事をしるし終わりて、九卷は撰び終りぬ。よむ歌には、髓腦打聞ずいのうちきこなど云て、多くありげなり。今様には未ださる事なければ、俊頼が髓腦をまねびて是を撰ぶところなり。そのかみ十余歳の時より今に至る迄、今様を好みて怠る事なし。遅々たる春の日は、枝にひらけ庭にちる花を見、鶯のなき時鳥の語らふ聲にも其の心をえ、せうせうたる秋夜、月をもてあそび、蟲の聲々に哀をそへ、夏は暑く冬は寒きを顧みず、四季につけて折を嫌はず、昼はひねもすうたひ暮し、夜はよもすがら唄ひ明さぬ夜はなかりき。夜は明れど戸部をあげずして、日出るを忘れ日高くなるをしらず、其聲をやまず。大方夜昼をわかず、日を過し月を送りき。其間、人あまた集めて、まひ遊びて歌ふ時もありき。四五人七八人男女ありて、今様ばかりなる時もあり、常にありしものを番において、我は夜昼相くして歌ひし時もあり。又我ひとり雑芸集をひろげて、四季の今様、法文、早哥に至る迄、書きたる次第を歌ひ尽くす折もありき。聲を割る事三ケ度なり。二度は法の如くうたひかはして、聲の出るまで歌ひ出したりき。あまりせめしかば、喉がれて、湯水通ひしもすぢなかりしかど、かまへ

てうたひ出しき。

或は七八十五日、もしは百日の哥など始めて後、千日の哥も歌ひ通してき。昼はうたはぬ時もありしかど、よるは哥を歌ひ明さぬ夜はなかりき。資賢、季兼など語らひよせてもきき、かがみのやまのあこ丸、このもりづかさにてありしかば、常によびてもきき、神崎のかね女院にょいんに候しかば、参りたるには、申て歌はせてもきしを、あまりにては、時々は是にてもいかで聞かではあらむざるぞとて、夜まぜにたばむとて給しかば、あの御かたへ参る夜は、人をあけて、暁かへるをよび、我たまはる夜は、未だあかきよりとりこめて歌はせて、聞習ひて歌ふ哥もありき。明方に返しやりても猶うたひしを、かねがつばねむかへたりしかば、明けて後も猶鼓の音のたえぬさまに、いつのひまにかやすむらんとあたみ申き。かくのごとく好みて六十の春秋を過しにき。

## その二

久安元年八月廿二日、待賢門院うせさせ給にしかば、日を打ちちて、闇の夜に向ひたる心地して、くれふたがりてありしほどに、五十日過し程に、崇徳院の新院と申し時、ひとつ所にわがもとにあるべきやうに仰られしかば、餘りまぢかくつつましかりしかども、好みたちたりしかば、其後も同じやうに、夜毎に好み歌ひき。鳥羽殿にありし時、五十日ばかり歌ひあかすとよりて、東三條にて船にのりて、人々つどへて、四十餘日、日出る程まで夜毎に遊びき。

如此好みしかど、さしたる師なかりしかど、資賢やかねなどがうたを聞とり、せうせう習ひて歌ふもあり、又歌ひあひたるともがらの歌を、しらぬをば互にならひつつ、なにとなく哥數しりた

ちては、足柄など今様も秘蔵の歌を知らむと思ひて、上手と聞きたよりを尋ねとりて聞しに、誠によく聞えしかば、常によびて歌はせき。足柄一二は習ひたりしかど、いと我に勝りて歌しり勝りたる事はなかりき。いちめほそ九郎蔵人禅師千手二郎などやうの者、其數を聞し程に、家成卿のさざなみ、五條が弟子と聞きて、彼中納言うせせて後、尋ねとりて、三月四月ばかりはをきて歌はせてありき。

かくの如く、聞かぬ者もなくきき集めたるに、はつ聲を資賢もめでたき由申。人々上手とのみ言ひ合ひたりしかば、いかで聞むと思しかど、ゆかりもしらでありしに、一條院の御めのと坊門殿ぐしてこむと契りたりしに、新院に一つ所を憚る由を聞きて、押小路京極の堂へ坊門殿ぐして来たりしかば、夜もすがた歌はせてきき、我も歌ひ、歌の事など互にとひなどして、夜明けしほどに、家成の中御門にありしかば返しにき。

かくの如き上達部かんたちめんじょうび上人じゆうひはいはず、京の男女、所々のはしたものの、雑仕ぞうし、江口、神崎のあそび、國々のくぐつ、上手はいはず、今様をつたふ者のききおよび、われがつけて歌はぬ者はすくなくやあらむ。或人申て云。さはのあこまるとて青幕あおぼかの者、哥あまたしりたる上手、此程のほりたりと申す。朝方がもとにある由、式部少輔しきぶしょうぶ、定正未だ六位なりし時申を聞きて、尋ねしかば、とどめおきて、足柄、兩三、伊地古いちこ、舊川ふるがわ、舊古柳ふるこやなぎ、少々習ひし程に、近衛院うせさせ給ひしかば、何となくてやみにき。

## その三

其後鳥羽院かくれさせ給て、物騒しき事ありて、あさましき事いできて、今様沙汰もなかりしに、保元二年の年、おとまへが哥

を、年頃いかでか聞かむと思ひし物語をしたりしに、信西入道是を聞きて、尋ね候はむ、それが子我もとに候とて、木工允清仲をよびて、かの五條がりいひやる返事に、左様の事もせて久しく成て、皆忘れにたり。其うへに其さまいと見苦しく候とて来らず。たびたびせめて後は、はしたなきさまになりしかば、すぢなく、正月十日餘りばかりに参りたりき。

遣戸の内に居てさし出る事なし。人をのけて、高松殿の東向のつねにある所にて、うたの談義ありて、我も歌ひてきかせ、あれがをも聞きて、晝あくるまでありて、其夜ちぎりて其後よびよせて、つばねしてきて、足柄よりはじめて、大曲様、舊古柳、今様、物様、田歌等に至るまで、未だしらぬをば習ひ、もと歌ひたる哥ふしたがふを、一筋に改め習ひし程に、是彼や様々もしりにき。足柄、黒鳥子、伊地古などやうの大曲の秘蔵の哥どもは、何れもいと替わらねど、少々は替われる節もまじれり。舊川にぞ、おとまえがやう、あこまろがには、殊の外に替りたれ。延壽がは、あこまろが同じさまなれど、それも末は替れる事多かり。

## その四

九月に法住寺にて花を参らせし時、今様の談義ありしに、夜もすがら歌ひて、返りてのあしたに、業房、能盛、又數多ありけるに、さはのあこまろ哥ざたしていひけるは、五條殿は年はをひくられたれど、聲も若く、よにめでたくうたはるれど、大は躰の足柄のやうを歌はでやあらん。目井が子にして暫く美濃にありしかど、とく京にゐにしかば、清経などがやうをこそ習ひたらめ。目井もまことの子供のやうには、よも教へざりけん物をといひしと、法住寺の御所にて能盛語りしを聞きて、乙前、さ申候はん事、たよ

りに候とて語りしは、監物清経尾張へ下りしに、美濃の國に宿りたりしに、十二三にてありし時、目井にぐして罷りたりしに、歌をききて、めでたき聲かな、いかにまれ、末とをらむることよとて、やがて相ぐして京へのぼりて、目井やがて一つ家にいとをしうして置たりしに、年頃のかはりには、これに哥を教へよと申ししかば、ちかごとをたてて皆教へて候しが、このこくばくは如何にしてか知り候らん。

かく申候にては我も申候はむとて、あこまろが母は、大進が姉に和哥と申候し也。それが申ししは、四三にとく遅れて、大曲の哥をばえ歌はざりしに、土佐守盛實が甲斐へ具して罷りたりしに、習ひたりしとこそ、おや申候き。たれかほも、母にぐして度々又ただもまうできき候しかど、上手ともしらで候きと申。さては四三がやうにてはあらぬにこそなどいふ沙汰あり。尚も小大進をめて、哥をも聞せおはしませかし、それぞ心にくき物は候とて前申。乃めしにやられぬ。

## その五

小大進、さはのあこまろ、延壽、たれかは、あこ丸がむすめなど参りあひたり。法住寺の廣御所にして今様の会あり。小大進が足柄をきくに、我にたがはぬよし申。あこ丸がには似ずして、此末足柄といふ乙前にたがはず。人々、いづらあこ丸がに似たりけり。五條がにはたがはずなど云あひたり。釈迦のみのりは浮木の歌、今はたうらいみろくとあぐる所など、露ばかりも御所の御様にたがはずと、其座に侍る成親卿、資賢卿す、親信卿、業房、季時、法師蓮淨、能盛、廣時、康頼、親盛、座の末には季時、色代かいがいしく、このふしたがはぬをめで感ず。廣時御哥もきかぬる

中よりのぼりたるが、かく露たがはぬ事の、物のすぢあはれなる事として流涕するを、人々これを笑ひながら皆涙をおとす。あこ丸はらだちて、小大進がせなかを強く打て、よかむなるつた又歌はれよと云。皆人悪みあひたり。

或人、澤につる高くと云ふ古柳、いと人しらぬときく。いかが、うたへなどいふを、大進、延壽ともにしり候はずと申。さほのあこ丸是を歌へり。或人、此古柳、常のには変りたる所ありときくに、これはさもなきはいかに、四三が説に、此古柳、この説に違ひて歌はむは用あるべからずとこそ申伝へたるにと云へば、延壽おとがうたひ候しはおろおるおぼえ候を、未だならひ候はずと申すに、小大進、あれを承り候はばやと申す。

或人、久しく歌はでひが事やあらむとて歌ふを、延壽、これこそおとと歌ひ候ひしにはたがひ候はねと申す。天台宗の哥の法花經八卷の所きかむと或人いへば、小大進歌ひて、又御様を承り候はばやと申す。或人歌ふ。かく歌はんと思ひ候が、聲の心に叶ひ候はぬに、このめでたさよとかむじ申す。新にんしが哥のほどどる、行者の句に、小大進ことにめでたく歌ひて、又承らむと申す。或人又歌ふ。それもかく此句をばえ歌ひ候はぬものをと申すを、季時、小大進が目出度さふしの違はぬさま、又承らんと申して、かく感じ申すよし色代して褒めののしる。此小大進、うたはする哥をば、殊にたえに歌はせて聞し也。あこ丸すこし世おぼえさがりて、人々そしる者ありき。餘りにしらぬ哥をもしりげにするあひだ、中々はけ顛れにけるが、小大進が哥を、乙前むすめと二人、御所の中にて聞きて、古への目井君が歌をききやかにこそ覚ゆれと感じ申しき。其後小大進いよいよ名を揚てなんありし。

## その六

其後乙前に或人とひて云。こと哥は、大曲の様はいと替らぬに、舊川むげににぬ。いかに。他人の此様に歌ふは一人もなしと云ふ。乙前、目井申し候しは、何れの時などは申しえず、人々集りてやうやうの哥談義して、大曲皆つくして沙汰せし時、目井が舊川のやうを歌ひしをききて、敦家、敦兼、又數多人々聞て、舊河は風俗の様にてこそ皆歌ひあひためれ。これは珍しくためてたきものかなとて、兩三反歌はせて、此様常になし。秘蔵して常には歌ふまじと、人々いひければ、此様をば後には歌はざりけり。

修理大夫すりのだゆうあきすえ頭季ひつめにて、すの俣青墓の君ども、數多よび集めて、やうやうの歌をつくしけるに、目井此様の舊川をいだしてけり。乙前やがてつけて歌ひけるを、清経、めでたきふし哉。常のふしにもにぬさまにこそ。此様をば人々えつけられじものをといひけるに、人々誠にしらざりけり。大進もしらざりければ、えついでやみにけり。

其後に、大進、目井乙前がある所にきて、かかる舊河の様の聲引きのありけるを、我を隔てて知らせでと恨みられて、すぢなく、是は舊河のなかに、もかりぶねとて、かくうたふ様の有るを、未だしらざりけるかとこそいひなしたりけれ。

目井は四三より後までありて、此人々どもは、皆われらにこそは哥をばとひあひたりしかども、今ようなりては我には習はずといふと聞きて腹だちけり。四三が弟子なりけれど、目井進まざりければ、親しき者ども気色にくしとてありけるを、この大進ことにかたらひて、いかならむことも隔てじとて、哥をも、目井、乙前、大進とは見合せつつありけるに、恨みられてすぢなくて、かくもかりぶねと云なしたりけると、乙前語り申しに、聞置たりしかど、何となく忘れてありしに、東山の法住寺に、五月の花の頃、

花参らすとて、江口神崎の君、青墓のすの俣の者つどひてありしに、今様の談儀ありて、様々の哥沙汰、少々は歌ひなどせし程に、小大進にとひて云。乙前が様には、何れも違はぬに、舊河こそかはりたれ、いかにとふ。大進申して云よもかはり候はじ。いかにかはり候やらむ。承り候はばやと申す。或人歌ひてきかするをききて、此様にはもかり舟が様とてこそ、大進は教へ候しかと申す。かねて聞きしに思ひ合わせて、興ありて覚え候き。

その日、すの俣の式部は、蟲鳥の哥をよく歌ひて、本よりは世に覚えいできてありし程に、やがて京にて身まかりにしかば、よのはかなき哀れにてやみにき。

## その七

清経、目井を語らひて、相くして年頃すみ侍りけり。哥のいみじさに志なくなりけれど、猶ありけるが、近くよるもわびしく覚えけれど、哥のいみじさに、えのかでありけるに、ねたるが、餘りむづかしくて、そらねをしてうしろむきてねたり。せなかにめをたたきしまつげのあたりしも恐ろしき迄なりしかど、それを念じて、青墓へゆく時は、やがて具してゆき、又むかへにいで、具して帰りなどして、後に年おひては、食物あてて尼にしてこそ、しぬる迄あつかひてありしか。近代（近世）の人、志なからむに、京なりともゆかじかしくこそいひけれ。

この乙前は、とくいりこもりにければ、伝へたる弟子どものなかりけり。中納言家成卿の、さざ浪に歌おしへよとて、家へやられければ、足柄、黒鳥（くろどり）、いち、舊川、ふるこ柳、田哥など教へたりしかど、餘り申たてながら、あまた歌を習ひ候しかば、たがふよしも候しかど、あながちにとをして教へむとも思候はで、殊

になをす事も候はず。皆も教へ候はざりしかば、伝ふるには及び候はざりきと乙前申しき。それに合せて聞合せしに、ふりもにず、違ふふしも多かりき。此さざなみは、船三郎が子にて、其やうを習ひて歌ひたれば、ふりはそのふりにてにぬにや、大方は哥なり。さしては教へたる弟子もなし。たうり、はつ聲、みな我弟子と人はしりて候へど、ひがごと候。清経ぞ教へ侍りしか、あやまりて、目井にさもあらむ秘哥ととう教へよと、清経が申し候しを、それはさらでありなんと、わが申し候しかば、皆さ心得たりと目井申しき。

たうりはつ聲を、餘にあけくれせためてぞ歌はせける。夜は餘りねぶたしとわびしがりて、たうりは外へたち出て、水に目を洗ひ、まつげをぬきなどしけれど、猶ねぶたがりてぞありける。餘り夜ごとに明して、夜あくれどとみしあげでうたひければ、乙前、世のつねならぬ事哉。夜明れば節はあげ、くるればおろすこそ常の事にてはあれ。いまいまく又かしがましきよ。時々はさなき折もあれかし。むづかしくなはいひければ、清経、などかく哥をばにくむぞ。若からん時こそ、かやうにてもあらめ。年老てめたつる人もなからむ折は、世たえせぬものなれば、哥好ませ給上臈もおはしまして、哥の節の覚束なからむには、某こそしりたらめとて、尋ねくる人もあらむに、哥をしりてこそ、老の末には左様にてあらめと申し候しが、よく申し候けると覺ゆと、我に哥教へ候し折、乙前申しき。

## その八

乙前八十四と云ひし春、病重くありしかど、いまだつよつよしかりしに合せて、へちの事もなかりしかば、さりととも思ひし程に、

程なく大事になりたる由告げたりしに、近く家を造りておきたりしかば、ちかぢかに忍びていきて見れば、娘にかき起されて向ひてゐたり。弱げにみえしかば、けちゑんの為に法花經一卷讀みて聞かせて後、哥やきかむと思ふといひしかば、喜びていそぎつなづく。

像法転じては

薬師の誓ぞたのもしき

一たびみ名をきく人は

萬の病なしとぞいふ

一三反ばかり歌ひて聞かせしを、経よりもめでいりて、これを承るぞ、命もいき候ぬらんと、手をすりてなくなく喜びしありさま、哀に覚えて歸りにき。其後、仁和寺理趣三昧に参りて候し程に、二月十九日に、はやくかくれにし由を聞しかば、惜むべきよはひにはなけれど、年頃見馴しに、哀さ限りなく、よのはかなさ、後れ先だつ此世の有様、今に始めぬ事なれど、思ひつづけられて、多く歌習ひたる師なりしかば、やがて聞しより始めて、あしたには懺法をよみて六根を懺悔し、夕には阿弥陀經をよみて西方の九品往生を祈る事、五十日つとめ祈りき。一年が間、全部の法花經讀みおわりて、次の年二月二十九日、あれに習ひたりし今様、むねとある、うたひて後、暁がたに、足柄十首、黒鳥子、伊地古、舊河などうたひて、はてに長歌を歌ひて、後世の為にとぶらひき。

それをもしらで、さとにある女房丹波夢に見るやうは、法住寺の廣所にて、わが歌をうたひけるを五條あま、白きうすぎぬに足をつつみて参りて、障子のうちにおゐて、さし向ひてこの御哥をききに参りたるとて、よにめで、われもめつけて歌ひて、足柄なごつねにも候はぬ、此ふしどもめでたさよとほめいりて、長哥を聞て、是はいかがと覺束なく思ひ候。げにめでたさよ。これを承り候へば、身も涼しく嬉しきと見て、兩三日ありて、かくみえ

候つる由を、女房参りて申す。さは聞きけるにや。しかじかありし由を語りて、我と女房達も、あはれがりあひたりき。其後、其日は必ずうたひて後世をとぶらふなり。

## その九

この乙前に、十餘年が間に習ひとりてき。其かみこれかれを聞きとりて歌ひ集めたりし哥どもをも、一筋をとをさむために、皆此やうに違ひたるをば習ひ直して、残る事なく瀉瓶し終りにき。年頃かばかり嗜み習ひたる事を、誰にても傳へて、其流れなども、後にはいはればやと思へども、習ふ輩あれど、これをつぐべき弟子のなきこそ、遺恨の事にてあれ。殿上人下臈にげ至る迄、相ぐして歌ふ輩は多かれど、これを同じ心に習ふ者は、一人なし。

この中には信忠こそは、年頃弟子にてもあり。千日のうたにまじりたる者はあれ。大やうは習ひたる哥は數多ありしに、足柄をさはのあこ丸に習ひたりしかば、やがて大曲のやうは、それに習ふべき也とて、後は教へざりき。仲頼こそ千日の哥皆歌ひ通したるものはありしか。吾より先達にてありしうへに、同じやうに歌ひてしかば、いと歌教ふる事はなりしかど、年頃伴僧にてありしかば、聲なけれど、せめ哥などはあしくも聞こえず。もしことばの聞えぬ事、末にきかむ事、などやなからん。貞清ぞ年頃伴僧してありしかど、こととの上手にて、さざ浪が流れを受たりき、とよよりは常にぐして歌ひしかば、少々ききとりて歌ふ事もありき。中頃廣言、康頼ぞぐして歌ふものにてあれ。これらもとより歌歌ひしりたる哥も多かりしかど、上日の所にて、いとしもなきつしやうの節などありしかば、ぐして歌ふに、聞きとりて直すもあり。又教ふる歌もあれば、おほやうはわがやとひてありて、皆人わ

が違はぬ弟子どもと思ひあひたれど、違へる事多かり。各々ふしはにするやうなれど、もとのふりにて、えそれをのかで、似ぬこと多かり。廣言はこは色あしからず、歌ひ過ちせず。節はうるせくにする所あり。心さとくききとる事もありて、いか様にも、上手にてこそ。いたくけうらに歌はむとて、聲をなだめて節をもてなさず。あまり興あらむと、此頃節のしりかしらはなたるを、けふこのみ歌ふぞ。いまだ至らぬと覚ゆるふしはうるせくにせたるも、其振によりたがふ也。いと我に習はぬ哥をも、わがやうやうといひて、表に心に任せて歌ふぞ、なからむ跡にわがるやをしむずらんと覚ゆる。

康頼、聲におきてはめでたき聲なり。細くけうなる上に、人うてせすいきつよし。聲をのどにおとしすえて、そこにつかひて、しつまりしむ事ぞなきは、つかひがら也。さとくもあり。娑羅林、早歌など、辨へ歌ふこと、心えたる上手なるが、歌の程より心がすぎて、まだしき哥をもとく心得て、のどむる事なくて、歌ひ過ち多かり。沙羅林も習ひたるままになだむる所なくて、上手の程よりはわかわかしくおさなき所を歌ふおりのあるぞ難にてある。たしなまずうははしりて物を習う故なり。やうの歌も足柄なども、我にも多く習ひたり。

## その十

たきの水、小大進、こひせばは、さはのあこ丸に習ひたるこそいひしを、我に習ひたるといふとかや。節もすこししどけなき所ありし物を。今熊野にて、廣言、康頼、わが足柄歌ひしにつけしを、歌うたひのひめうし、資賢が側にて聞きて、この人共御やうをこそ歌ひあはるらめと思ふに、なに事をせらるるやらん。此

頃足柄のふりにてはあるとこそいひけれ。ふりは似ずと思ひけるにこそ。此ひめうし、目井が弟子、伊通伊實父子の愛物なり。

清重、これらより後に参りたれど、もとより上手なるうへに、哥をつるはしく歌ひて、いと違はず。人に教ふるをも聞きとり、常につけて歌ひてたがはず、娑羅林の今様など、殊によく歌ふ。過ちなぎうたにこそ。親盛これにて歌ひ習ひたれば、いと違ひたる事なし。やうのうたなどしらぬ多かり。とよりく是ら三四人くして習ひしかば、いと違はねど、各ふりは似ぬ所々あり。相くしては違はねど、おのおのたがへることふりは多かり。為保こそ歌數は習ひたりしかど、聲の弱くていとよくも聞えぬは、とく習ひすさびて、はいまつして、足柄とつは、おとまへがもとに、むるまちとて有し内々習ひき。それも我やうににざりけりとして習はざりき。為保こそ、善悪しらすわがやうとをし習ひたる者にてはあれ。それにとりて足柄のふりなど、あしくもなかりき。やうの歌いとつくさねど歌ひたりき。今様ぞしらぬ多かれど、他人にいと習ふ哥はなし。

能盛わざとなからしかど、明暮ありて歌ひあつめたる、物のやうは、數多知りたるにや。こやなきなどは、よく歌ひたるもあり。今様も習ひあるはしりたれど、聲ぞいとしなはぬやうに歌ひ静めても覚えねど、いとふしは違はず、これらもこと人に哥はならはず。業房同じやうに習ひてうたひならひて歌ひしに、こゑ色よくてしからず。今様神哥などは、上手にもいと劣らず聞ゆ。娑羅林のうたなどは、よく習ひたりき。物のやうぞ、つけて聞きとりて歌ひしかども、いとしらざりし。

知康、昨日今日の者にてあれども、聲あしからぬ上に、おもなく歌ふほどに、習ひたる程よりは上手めかしき所ありて、あしくもなし。實教も未だまだしかりしかど、哥の会にいりにしかば憚りなし。未だ至らぬ程よりは、拍子などはたがへず。雅賢、大やうもともうたひしかど、娑羅林、早歌、高砂、双六などやうの歌

は、我にも習ひたりき。うたふにふしいとたちろがず、すこし聲の弱かりしもよくなりて、しかも重代なり。さたに及ばず、定能さだよし聲むげに不足にて、あるべくもなかりしかど、をめからして、殊の外に聲つかひ心えて、ふりなどはたしかに忘れず。まへはらふほどにあり。

花山院中納言兼雅、もと歌は殊の外にさたしげにもあり。哥數うたひげなりき。定能、雅兼、實教さねのりなど、蓮華王院にありし時、習ひあひたりしにぐして、今様、早哥などせうは歌はれき。足柄式三首ばかりぞ習はれたりし。この兼雅卿、今様合の時に、足柄のなかにするがの國歌はれしを、おと前が娘ききて、これは御所よりのたまはられたると覚ゆるふしのあるは、習ひ参らせたるやらむといひける。こと歌よりはつけて度々歌はれたりしを、かく申せば、のどかにてつけてふりのにるべきとこそ覚えしか。

## その十一

五月はなの頃、江口、神崎の君、美濃のくぐつ集りて、花参らせし事ありき。哥ざたありしに、延壽、こひせばと申す足柄を未だ歌はぬとて、御所に習ひ参らせたまきを、え申しいでぬと、これかれにきかれ候といふに、聞きしかども、聞きいれぬやうにてありし程に、季時入道して申し出したり。いかでさる事はあらむずるぞ。さかさまごことにてぞあらむ。我ためは名聞にてこそあれど、片腹いたし。さはのあこ丸歌ふめるは、それにならへかして返事にいふ。延壽又申やう、いかさまにも習ひ参らせて候はむこそ、此世の喜にては候はぬ。あこ丸は大進も小大進も、皆しり候はぬを、誰に習ひたるぞと覚束なく候。又これらもさ申せば、かたがたにと申せば、後にこそ、これらるときありてき

きとられなむずるは、獨あらん時にさらば教へむと語りしを、残りどまりて習はむといたく云しかば、おと前に、いたくいふにかにと語りしを、さ申さば教へ給へかし。さ様にいみじがり申さば、さやうのれつにてこそ候へと、おと前申しかば、よるよる二三夜計りにぞ教へたりし。にせぬ所もかたはらいたく覚えて、えなをさで、われよくなる迄歌ひてぞ教へし。其後暇乞しに、とくとてありしを、よび返して歌はせて聞きしに、神妙也といはれて、

四大聲聞いかばかり

よるこび身よりもあまるらん

我らは来世の仏ぞと

たしかにききつるけふなれば

と歌ひたりしかば、感にたへずして、唐綾からあやのそめつけなる二ぎぬを、纏頭てんとうにしてき。

折節につけては、けつがりておぼえき。かやうに男女これかれ、我に歌を習ふ者其數ありしといへど、皆このみさしつ、しじうならふ者なくて、あひつぐ者なし。年頃好みたる事に、たしかに傳へたる弟子のなき、くちおしき事也。

## その十二

我、永曆元年十月十七日より精進を始めて、法印覺讚を先達にして、二十三日進発しき。二十五日むまやどの宿に、為保左衛門尉にてありしに、それがぐしたりし先達のゆめに此度参らせ給ふはうれしけれど、ふる哥をたばぬこそはおしけれと、見たる由を申す。元より王子にてはする事をばすなるに、御哥などはあるべ



き物をなどいふ者有しかど、餘り下臈がちにて、けんぞにやなど云ふ者もありて、有しほどに、かくゆめの事を聞きて、さうなく歌はむとて、馬やどを夜深くたちて、長おかの王子に夜のうちに参りぬ。

相くしたりしかば、太政大臣清盛大式と申しし折なるべし。参りあひてありしに、此夢をいひあはせしかば、さる事候はば、さこそ候なれ。さらにをよび候はぬよしを返事に申して、心のうちいたく雑人など數多ありて、いかがと思ひける程に、きとねいりたりけるに、束帯したるこぜむぐして、唐車に乗りたるもの、御幸のなるやらむとおぼしくて、王子の御前にたてたり。此歌をきくにかと思ひて、きと驚きたるに、今様を或人いだしたりけり。其歌にいはいはく、

熊野の権現は

名草の浜にぞおり給ふ

わかぬ浦にましませば

としはゆけども若王子

これを驚きて、資賢卿に語りて、あざまれける。夢に思ひ合せられて、人々けんてうなる由を申あひたりき。霜月二十五日奉幣して、経供養御神樂などをはりて、禮殿にて、我音頭にて古柳より始めて、今様もの様まで、數をつくすはざまに、やうやうのことびわ、舞、猿樂をつくす。初度の事也。

## その十三

應保二年正月二十一日より精進を始めて、同二十七日たつ。二月九日日本宮奉幣をす。三御山に三日づつ籠りて、其あひだ千手経

千巻を転読し奉りき。同月十二日新宮に参りて奉幣す。其次第常の如し。夜ふけて又のぼりて、宮めぐりの後、禮殿にして通夜千手経を読み奉る。暫しは人ありしかど、片隅にねぶりなどして、前には人も見えず。通家ぞ経まくとてねぶりたる。やうやうの奉幣などしづまりて、夜中ばかり過ぬらんかすと覚えしに、寶殿の方を見やれば、わづかの火の光に、御正躰の鏡所々輝きて見ゆ。あはれに心すみて、泪もとどまらず。なくなく読めたるほどに、資賢つやはてて、暁方に禮殿へ参りたり。今様あらばや、只今面白かりなんかすとすすむれば、かたまりてゐたる。すぢなくて、みづからいだす。

よるづの佛の願よりも

千手のちかひぞ頼もしき

枯れたる草木もたちまちに

花咲みなると説い給ふ

押返し押返したびたび歌ふ。資賢、通家つけてうたふ。心すましてありしけにや、常よりもめでたく面白かりき。覺讚法印、宮めぐりはてて、御前なる松木のもとにつやしてゐたりけるに、其松の木の上に、心とけたるただ今かなと歌ふ聲のしければ、夢現ともなくかく聞きあざみて、禮殿に参りて急ぎ語る。一心に心すましつるには、かかる事もあるにや。夜明るまでには、うたひあかしてき。これ第一たびなり。

## その十四

仁安四年正月九日より精進を始めて、同十四日進發。二十六日奉幣也。今度第十二度に當りて、出家のいとまを申しに参る。毎

度に王子の今様、禮殿の遊び度々ありき。此姿にては今度計りにてこそあらむずれば、我獨り兩所の御前にて、なかとこにねぬ。さいとうの火の光ありて、つゐたて障子を少し隔てて、たれともなきやうにて、そばそばに成親、親信、業房、能盛。まへのかたに康頼、親盛、資行ねあひたり。

こなたは暗くてさいとうの火に御正躰の鏡十二所、各光をかがやきて、應仕王の姿うつるらんと見ゆ。これかれの奉幣の聲、やうやうに聞ゆ。法樂のものの心経、もし千手法花経、心々にかはるにつけて尊し。其まぎれに長哥より始めて、古柳さがりふぢを歌ふ。次に十二所の心の今様、其後娑羅林、つねの今様、片下、早歌、ふしあるをつくす。神哥など果てて、大曲のやうになりて、足柄、黒鳥子、古川はてて、いちこを歌ふ。

暁がたに皆人しづまりて、人音せで、心すまして、此いちこをことに歌ひし程に、兩所にしの御前の方に、えもいはぬさかうのかす。成親、こはいかなる事ぞ、これはかくやと親信にいふ。皆其座の人怪みをなす程に、又寶殿なりて聞ゆ。又成親驚きて是はいかにと申す。われよようにんのかりおほいしたるに、鶏のねたるが音にこそといふ。しばしありてかうばしきみちにほへり。さて御簾をかかけて、人のいらむやうに、御簾はたらきて、かかりたる御正躰の鏡どもなりあひて皆ゆるぎて久し。其時驚きてさりぬ。寅の時なるべし。

## その十五

同じ寅の二月七八日頃、大雪降りたりし日、さまをかへむいとま申に賀茂へ参りき。まづ下の社に参りてみるに、面白き事限なし。おまへの梅の木に雪ふりかかりて、何れを梅とわきがたく、

あけの玉垣まで皆白妙に見えわたりて、たくひなく覚ゆ。次第の事みかぐら果てて、其後法花経一部、千手経一卷を転読し奉り、終りて後に成親卿平調に笛をならす。さいばらを資賢卿いだす。青柳、更衣、いかにせんなり。其後われ今様をいだす。

はるのはじめの梅の花

よるこびひらけてみなたか

資賢第三句をいだしていはく、

みたらし川のうす氷

心とけたるただいまかな

と歌ふ。おりにあひめでたかりき。

敦家内裏にてこの句を、前のながれのみかは水と歌ひけるも、かくやありけむと、われ感じをくりనికి、

松の木かげにたちよれば

ちとせのみどりぞ身にしめる

むめが枝かざしにさしつれば

春の雪こそふりかかれ

と、この哥卅反ばかりありけり。其後同じ人神哥をいだす。

ちはやぶる神々に

をはしますものならば

あはれにおぼしめせ

神もむかしは人ぞかし

其後足柄四首、あまのとうさい二反、物様、瀧水、黒鳥子、伊地古、舊河これら也。此歌ども、おりからにや、常よりも面白き事がぎりなし。其座に、権中納言成親、源宰相資賢、三位中将兼雅、中将宗盛、少将通家、右馬頭親信、これら也。今様始りける程に、東の寶殿の御戸あく音しけり。参り集ひたる男女、御幸には、をとのひびきのあるかと思ける程に、寶殿の中よりびはの聲歌につけらるるかと思く人怪みけり。後にかもの者共さたすと。資賢かたりしにぞききし。熊野のやうにわれらはきかず。

## その十六

あきの厳島へ、建春門院に相ぐして参る事ありき。弥生の十六日京を出て、同じ月二十六日参りつけり。寶殿のさま、回廊長くつづきたるに、汐さしては回廊の下まで水たたへ、入海のむかへの浪白く立ちて流れたる、むかへの山を見れば、木々皆青みわたりて緑なり。山にたためるがんせきの石、水ぎはにしろくしてそばだてたり。白き浪時々うちかくる。めでたき事限なし。思ひしよりも面白く見ゆ。其國の内侍二人、くろ、釈迦なり。唐装束をし、かみをあげて舞をせり。五常樂、こまほこをまふ。伎樂の菩薩の袖ふりけむも、かくやありけんと思えてめでたかりき。

公卿、殿上人、樂人、太政入道、その供人、未だ座を立たぬほどに、まさしき巫女とて、年よれる女をぐして人來れり。我に向ひてぬぬ。いふやう、われに申すことは、必ず叶ふべし。後世の事を申すことあはれに思しめせ。今様をきかばやといふ。餘りはれにして、しかもひるなり。いだすべき様もなくあるに、なを度々いへば、資賢をよびて、これうたへといふ。かたまりてみたり。なをきかむといへば、すぢなくていだす。

四大声聞いかばかり  
よるこび身よりもあまるらん  
我らは後世の仏ぞと  
たしかにききつる今日なれば

いだして、これつけよといへど、資賢あらで、つくることなくて二反終りにき。心に後世の事他念なく申し事をいひ出たりしかば、しむをこりて、泪おさへ難かりき。太政入道、此御神はごせを申すをよるこばせ給ふよし申されしかば、さらぬだに現世の事いと申さぬ上に、さありしかば、後世を申すをいひいでたりしなり。

## その十七

我八幡に参りて、十ヶ日籠りて、千部經を始めてよみしに、九月二十日より籠りたりしに、二十五六日のほど經はてて、今様を御前にしてよもすがら歌ひき。夜中に及ぶ程に、足つつみたる女の、中門のもとに親盛めたる所によりて、うしろをひく。申けむになにわざいふと聞きいれず。又よりて度々なる折、見かへりてみれば、勸學院のくりやめ也しが、いふ事をきけば、夢に、このはしがくしの柱のもとに、うつくしき稚児の十二三ばかりなるが、うらうへに、一人はうすあをの狩衣におりたるわきあけをきたまひたるが、白馬にたてまつり、今ひとり白きつすものと覺しきに、したはこむはいに見ゆるをめて、ぶちなる馬にのりて、うらうへに立給ひて、この御哥をきかせ給ふと覺しく見え候て、うち驚きて候へば、

みねのあらしのはげしさに

きぎの木の葉もちりはてて

この哥の盛りにおはしますに、右の後ろをむけてゐさせ給たるそとつけ申すよしをおこしに来るなり申けり。この女、夢の中に、若宮のこの御哥を聞せおはしますと覚えし由を申す。さて次の夜若宮に参りて、今様の会終夜ありて後、乱舞、猿楽、白拍子、品々しつくしき。治承二年九月四日の事なるべし。

神社に参りて今様歌ひて、至現をかぶること度々になる。いちいち此事を思ふに、聲たらずしてたえなる事なければ、神感あるべき由をぞむぜず。唯年頃たしなみ習ひたりし功の致す所か。又ことに信をいたして歌へる信力の故か。おほよす今様を好む事四十餘年の功の致す。

かくの如くこう入たるもの、古きものもすくなくやあらん。しかはこのめど聲こはくたらずして、其えたらぬてうそのうらみふかしといへど力及ばず。此この故にはあさましき不足の聲なれど、楽しくめで度おひつくべくもなき聲にあひても、又女のせめて及ばぬにも、やうやうせめあひたるにいと聲及ばずすてらるる事は覚えぬ。たかかりたるも、さがりて、つかひにくき調子なれど、歌ひにくしとおぼゆることはなきぞ、この功の致す所には覚ゆる。

## その十八

此今様、けふあるをとつにあらず。心をいたして神社仏寺に参りて歌ふに、至現をこつづり、望む事叶はずといふことなし。つかさを望み、いのちをのべ、病をたち所にやめずといふ事なし。敦家、聲めでたくて、みたけにめしとどめられて御眷属となり、目

井は監物清経病に煩ひて限りけるに、ざうほうてんじては、やくしの誓そと歌ひて、たち所に病をやめ、ちかくは左衛門督通季おこり心地にわすらひて、ししこらかしてありけるに、ゆめゆめいかにもそしるなきに、両度歌ひて汗あへてやみにけり。くびにそいで、今はかぎりにて、くすしもすてたるもの、うつまさに籠りて今様を他念なく歌ひて、忽にそつづれてやみ、又目しるたる者、みやしるに籠りて哥を歌ひて百餘日、目あきて出にけり。

これならず、あそびとねくるがいくさにあひて、臨終のきざめに、今は西方極楽のと歌ひて往生し、高砂の四郎君、聖徳太子の哥を歌ひて、そくわいをとげにき。此今様をたしなみ習ひて、秘蔵の心ふかし。定めて輪廻業たらむか。我身五十餘年をすこし、夢のごとしまぼろしの如し。既になかばは過にたり。今はよろづを投捨てて、往生極楽を望まんと思ふ。

## その十九

たとひ今様を歌ふとも、などか蓮台の迎へにあづからざらむ。其故は、あそびのたぐひ、舟にのりて波の上にあそび、流にさをさし、きものをかざり色を好みて人のあひ念を好み、哥を歌ひてもよくきかれんと思ふにより、外に他念なくて罪に沈みて、菩提の岸に至らむ事を知らず。それだに一念の心起こしつれば往生しにけり。ましてわれらはとこそ覚ゆれ。

法文の哥、聖教の文に離れたる事なし。法花経八巻が軸々光をはなちはなち、二十八品の一つの文字、金色の仏にまします。せぞくもんじのごうひるがへして讚仏乘のいん、などが転法輪にならざらむ。大方詩を作り、和哥をよみ、手をかくともがらは、かきとめつれば、末の世迄もくつる事なし。こゝろわづの悲しき事は、

我身かくれぬる後とどまる事のなき也。其故に、なからむあとに人見よとて、未だ世になき今様の口傳をつくりおく所なり。

嘉應元年三月中旬のころ、これらをするしおはりぬ。やうやうえらびしかば、初けんほどはおぼえず。

## その二十

左兵衛佐資時、治承二年三月二十三日、瀧尻宿よりはじめて、二年が間に、今様、娑羅林、片下哥、足柄、黒烏子、伊地古、舊古柳、権現、御幣等、物様、田哥に至る迄、皆習ひて瀉瓶し終りぬ。熊野の道より起る。年頃つくものなしと思ひしに、権現の御はからひか、家重代なり。他人にことなり傳へたらむに、その道なるか。

太政大臣師長、琵琶の譜につくらむとてありしほどに、後には習ひて、大曲のやうは皆歌はれにき。今様もむねとのうた、娑羅林、片下、早哥のやうあるは歌はれき。これ二人がやうぞ、ふりいとたがはぬにて有べき。是に同じからんをばよく習へりと思ひ、違はむをば疑をなすべし。我も我もわがやうといふもの多からんずらむ。だうじだにわがやうとて、もろもろのひがぶりをいふめれば、ましてなからむあとと覚えてこそ。